

母の死まで
田中 洋
(1999 年『ada』掲載)

母が亡くなったのは昨年九月三十日である。誰もそういう事態になれば驚きとまどうだろう。そして誰もがなぜ今そんな瞬間が訪れるのかとうらむだろう。しかし母親が亡くなることは誰しにも起りうることである。だからこれはそのような誰も人生で起ることの平凡な記録に過ぎない。

私はその朝五時近くなるまで机に向かって自分の部屋で仕事をしていた。四時五十分くらいのことだ。突然私の机の角においてある電話が鳴った。そんな時間に電話になるとは尋常なことではない。妹の夫のY君からだ。四時半ころ病院で母が亡くなったと言う。なぜ、としか言いようのない感情が湧きあがった。いつかはと思った事態が起っていたのだ。母はもうこの世の中にいないのだ。

幸い父と妹は最後の瞬間まで病院で付き添っていられたという。午前三時ころ病院から急を告げる電話があり、父と妹はすぐさま病院に向かったらしい。母はその年の二月から骨髄の癌を病んでいた。母には癌であることは伏せていたので最後までその病因からくる症状の腎臓病であると思っていたはずである。その年の夏、見舞いに訪れたときはベッドに起き上がるほど元気で、見舞い客の薄着を冷房で寒いのではないかと、自分が病気のくせに心配していたくらいであった。

私には近親を亡くすというのは初めての経験だった。そのようなとき情報だけで人間は死を悼むことはできない。現実感はないもののこれは悲しい事態なのだと自分に言い聞かせているような気がした。

私の実家は名古屋である。横浜の家からは四時間ほどで着くことができる。朝一番の新幹線で帰ろうと思ったものの、準備で時間を取り結局八時ころの新幹線にやっと乗ったと思う。自分でも帰って母の死に直面することに抵抗があったのだろう。自分では母の死を認めたくなかったのだ。そのせいで家を出るのは思ったより遅くなってしまった。どうせ母はもう死んでこの世の中にはいないのだ。早く帰ろうと遅く帰ろうと同じことだ。

名古屋駅を降り、地下鉄に乗り、何度も行き慣れた病院への道をたどった。以前は何度もこの道をつたって母親の見舞いに行った。今日は母が亡くなったことを確認しに行くようなものだ。

病室へはなかなか行き着けなかった。病室を最近変わったことを思い出せなかったのだ。病室では姪がひとりで待っていた。既に亡骸は地下室に移されていると言う。ベッドの手すりや床は血の跡がある。母が最後に流した血だ。

母が亡くなったのは直接癌が原因ではなかった。治療のために腕に付けた点滴用の針が

寝ている最中にはずれてしまったのだ。担当の医師に話を聞いたがなぜそのようなことが起きたのかははっきりしないと言う。そのため母の死体は解剖された。もっとも死因に不審な点があったわけではない。単に針がはずれて出血死したのだ。医者はこのような最期で残念だとしきりに言った。その医者とは私とはそれまでに何回か母の容体について話を聞いてきた。私の素人の判断でもその医者の癌に対する知識や経験は大変優れたものと思え、私は全面的にその医師を信頼していた。だから母の死に際してもその医師を怨む気持ちにはなれない。医者の判断では無意識のうちに母が点滴の針を自分ではずしたのではないかという。しかし針はしっかり母の腕につけられており、ちょっとばかりの力でははずせるものではないのだが。

母はおそらく眠りながらいつまでも病院にしばりつけられている自分の状態に我慢ができなくなったのだろう。そして自分でその針と管とを取って自由になろうと思ったのに違いない。

母はいずれ癌で死すべき運命にあった。医者に聞くとその癌の末期には肺炎を起こすなどして亡くなることになるだろうと予測していた。母の死に方は突然だったが見事なものだった。苦しむこともなく、あっさりこの世の中から去っていった。ちょうど私がその一週間前にアメリカとカナダの学会出張から帰国したばかりであった。兄は香港に駐在していたが、すぐその日帰国することができた。私たち一家はうまく揃うことができた。これも母がそこまで気を遣ってくれたような気がしたものだ。

その日私と父は遺体をハイヤーに乗せて家の横を通りすぎて葬儀場に向かった。父が「家だよ。帰ってきたんだよ。」と話し掛けている。何も言わない眠ったままの母に。

式場の都合で通夜は母が亡くなったその当日に行われた。父はすでに疲れ果てお通夜にも翌日の葬儀にもいけないかもしれない、とすら言っていた。しかし驚いたことに夕刻すっかり元気になった会場にやってきた。母親の最後のパワーが父に働いたのだ、と皆が話した。

翌日母の葬式を行った。その三ヶ月前、伯父が亡くなったのを見送った同じ会館である。雨だったが多くの参会者、飾りきれないほどの供花、読み上げることもできないくらい沢山の電報を受け取った。兄の関係で芸能人からの電報や花も多く届いた。母はにぎやかな人だったのでそのことを喜んでいたはずだ。式の前後、私は眠るような表情の母の死体に触れることができなかった。冷たい死体に触れることなどどうしてできるだろうか。母の棺には花をたくさん投げ込んだ。私はそのときに本当に泣いた。涙があふれ出た。何かを言いながら花をたくさん母の亡骸の周りに撒いた。花が最期の瞬間まで母を慰めてくれるように思えたのだ。

母の亡骸を乗せた霊柩車は実家の横を過ぎて火葬場へ向かった。母は四十数年前に父と建てた家をこよなく愛していた。そこで四十年以上父の仕事を手伝い、子供を三人育て、笑い泣いたのだから。その家を最後に母は通り過ぎていった。

一時間足らずで母の亡骸は骨の燃え殻になった。私たち親戚は談笑さえしてそれを待っていた。悲しい状態のままで人はいつまでもいることはできない。そのころ母と私たちとの関係は死者と生人との関係になっていた。遺骸が焼けてまだ暖かいその骨箱を抱きながら私たち残された家族は会館で親戚と会食してから家に帰った。もう母のいないその家に。

母の晩年は幸いなものだったと思う。孫を五人持ち、書道に良く励み、何度も賞を取って自慢げに我々にそれを見せたものだ。写真をそのたびに送ってきた。我々はそんな母の晩年の達成にあまり熱心に耳をかさなかった。しかしそれは母が熱心に取り組んだ最後の仕事だった。

母親は幼少時にはあまり幸せだったとはいえない。本当の父母からは別れて養母のもとで育てられた事情に何があったかは知らない。養母もひとりで母を育て、母ひとり子ひとりで育った母の性格には、いつも愛情を希求する精神があったと思う。それは同じ境遇で育った人には共通しているような気がする。随分前に列車の中であったある女性と話していたとき、その人の心の傾向があまりに母と似ており、育った家庭を聞いたところ母と同じだったので驚いた記憶がある。母の心の中にはいつも他人を愛し愛されようとする激しい要求が生じてくる空洞があった。

このため母が他人を思いやる心は強いものがあった。子供もそのようにして育ててきたのだ。子供からそれは時にうとうしいものとして感じられた。母がそのような境遇で育ったことにはほとんど思い至らなかったのだが。

母にしてやれたことがどれほどあるか私にはわからない。私が長年務めた会社を辞め、三年前に大学の研究者に転職したときは余り何も言わなかったように思う。母が亡くなる前年の秋に実家の名古屋で講演会をしたときのことである。先ほど家で別れたばかりの母が突然その会場に紛れ込んできたのだ。もちろん母はその講演会の参加者とは何の関係もない。私はひどく怒りを感じたのだが、その場では務めて母親には怒らないようにした。講演会が終わってから母と短い時間話をした。母はばつが悪そうにそそくさと会場を去って行った。その小さな後ろ姿を思い出す。そのときもっと暖かく接してやればよかったのかもしれないが。昨年東京のH大学に再び勤務先を変ったときは喜んでいただようである。そのことを自慢して友人に話していたと後から母の友人から聞いた。四月になってその大学に正式に着任したことを一番先に病院の母に報告した。

母はいま妹の家の仏壇で眠っている。近く墓に入れてやるつもりだ。母を慈しんだその母と共に永遠に眠りにつくのだ。私たちは母から愛を十分受けることができたが、母は十分愛されたと感じているだろうか。そう感じていると想像するのが私のささやかな慰めである。

一九九九年一月十五日記
(了)